あの人が通る

平和の大切さを伝えるのが使命

下垣　真希　ソプラノ歌手

のびやかで力強い高音は、人類普遍のメッセージ。長崎で被爆した叔父の存在、冷戦末期の西ドイツに身を置いた経験から、ソプラノ歌手の下垣真希さん(五二)は歌を通じて平和と命の大切さを訴え続けている。生きることは素晴らしい。聴く人にそう思ってもらえることを願って。

（古谷祥子）

音楽との出会いはいつごろですか。

僻地医療に携わっていた医師の父の関係で岐阜の山奥で育ちました。オペラが大好きな父と、ピアノが趣味の母。野山で遊んで家に帰るとクラシックが流れているという環境で、物心がついたころには音楽がそばにありました。自然と母からピアノの手ほどきを受けるようになりましたね。

声楽の道へ転向されたきっかけは。

音大を目指して高校から親元を離れました。姉と二人で名古屋で暮らしていたのですが、想像以上に練習がきつかった。受験を意識し、楽譜通りに完ぺきに弾くことばかり求められて、嫌になってしまった。高二でぱったりピアノをやめ、半年間音楽のない生活をしました。母はそれを残念がって、ある時、自分の恩師の音楽の先生を私に紹介したのです。

その方が私の大きな声、話すときの表情の動きを見て「この子は歌い手そのものじゃないか」とおっしゃって。歌って表現することは大好きだったし、音楽から離れてみて、やっぱり自分にとってどれだけ大切なものだったか気づいて。

大学を卒業し、留学された一九八一年ごろのドイツは、激動の時代でした。

当時はソ連が瓦解し、東欧諸国が自立し始めたころで、東西ドイツも一触即発の状態でした。人々は国の将来を真剣に考えていて、中学生ですらいっぱしの政治の話ができた。でも私は国際情勢について意見を求められても、何も言えなくて。高度経済成長期の日本で育ち、何の問題意識も持っていなかった。言語が分からなかったのではなくて、語るべき言葉がなかったのです。

留学してすぐに、声楽で世界の壁の高さを感じました。欧州人と比べ素養が違いすぎると。焦りを感じ、練習嫌いだった私が練習のし過ぎでのどを壊してしまった。話し声すら出ず、帰国して治療しました。思い返すとそれまで必死で歌ってはいたけど、歌が自分にとってかけがえのないものというほどの意識はなかった。

だけど、声を失い「もう二度と歌えないかもしれない」と考えたら、「絶対に嫌だ」って思ったんです。両親の反対を押し切り、再び日本を飛び出しました。

ご自身の音楽人生を支えている人との出会いについて教えてください。

挫折するたびに、必ず道しるべとなる光を当ててくれる人たちがいました。ドイツに戻った私に手をさしのべてくださったのが、ヤコブ先生。普通、いったん声を壊した学生を教えたい人なんていませんよね。先生は「三年間、歌は歌わせない。それでも私に付いて来られるなら教えよう」とおっしゃった。指導は顔の筋肉の動かし方、表情の作り方などで、本当に歌わせてもらえなかった。無償で週二回、発声の基礎を一からたたき込んでくださいました。

日本に帰国後に九州で偶然会った（世界三大テノールの）ドミンゴさんもそう。当時、私はまた声の調子を崩して悩んでいたのですが、ドミンゴさんから「声は神様からの贈り物だよ。声の出る限り感謝して歌い続けなさい」と言われました。その言葉があったから今も歌を続けていられるのだと思います。

藤山一郎さんの名曲「長崎の鐘」の歌詞の原作者、永井隆・医学博士と浅からぬ縁があるそうですが。

私の叔父は大学生の時に長崎で被爆し、命からがら家族の元へ帰って間もなく亡くなりました。叔父が長崎で下宿していたのが永井先生のお宅でした。幼いころから私の家には「平和を」と書かれた先生の書があり、親から先生の被爆体験や壮絶な生きざまについて聞いていました。

でも正直、そんな話は自分にとって「対岸の火事」で、どこか人ごとだった。でもその思いは留学で変わった。ドイツでは、日曜のお昼に家族が集まるのですが、当時の話題はヒトラーの大罪や戦後の復興について。同じ敗戦国の日本と比べ、こんなに問題意識が違うものかと。冷戦末期で政情不安だった西ドイツに身を置いて初めて、叔父や永井先生の体験について、真剣に思いをめぐらせるようになりました。

その経験が平和や命をテーマに歌う原点となったわけですね。

二〇〇一年に起きた米国の同時多発テロで「憎しみは憎しみしか生まない」と再認識させられました。永井先生は妻を失い、自分も被爆して苦しみながらも、放射線の専門家としてほかの被爆者の救済に当たった。「憎しみを捨て、人を愛しなさい」と伝えようとしていた。私は戦争を知らないけれど、叔父や永井先生の体験を聞き、その思いを伝えることが自分の使命だと気づきました。

「ふるさと」や滝廉太郎の「花」など、日本の昔の歌もよく歌われています。

日本の昔の歌の素晴らしさって、理想を歌っていることだと思うんです。自然の美しさや命を貴ぶこと。今の時代で忘れられかけているのではないでしょうか。理想なんて「奇麗事」と切り捨てられるかもしれないけど、奇麗事と理想は実行しようと努力するかどうかという点で違う。

それと、行間を読むような直情的でない歌詞に崇高さがあると思う。ドイツのハノーバー万博で、美しい日本の四季を象徴する「さくら」「浜辺の歌」などのメドレーを歌った時の反響はすごかった。「日本の歌は世界に通用する」と確信しました。

大学で学生を教える中で、若い人たちについて思うことはありますか。

困ることなく育ってきた世代で、どこか生きている手応えが薄いのではないかと。それって若者にとっては毒でしかない。命や生き方について、疑問を持ってほしい。

「もし戦時中に生まれていたら、特攻隊員になって戦闘機に乗って死んでいたかも」とか、「おじいさんが亡くなっていたら今の自分はいなかった」というように、自分の立場で考えること。

学生は捨てたものでなく、それを伝えようとすると、感じてくれます。生きたくても生きられない時代があったと伝え、同時にその時代の人たちを思いやる心と感性を磨かせる。子どもたちにそういう場を与えることが大人の役割ではないかと思って授業をしています。

インタビューの前、下垣さんのコンサートを聴いた。四季の情景が浮かぶような日本の唱歌に始まり、永井先生が自らの被爆体験から命の重さを説いた「長崎の鐘」など十五曲に耳を傾けた。

お会いした下垣さんはとびきり明るい人で、「音楽は心で作るもの。その力ってすごいんです」と語る笑顔が光っていた。下垣さんの歌を聴いた叔母は、長崎の爆心地から戻った叔父がもがき苦しみながら死んでいった様子について、五十年以上閉ざしていた口を開いたという。

一曲の歌は時として、どんな言葉よりも心を揺さぶる。会場に響く歌声を聴きながら、自然と涙がこぼれ出た理由が分かった気がした。

インタビューを終えて

あなたに伝えたい

日本の昔の歌の素晴らしさって、理想を歌っていることだと思うんです。自然の美しさや命を貴ぶこと。今の時代で忘れられかけているのではないでしょうか。

写真・中森麻未

しもがき・まき　1957（昭和32）年島根県生まれ。中学まで岐阜県下呂市で育ち、金城学院高（名古屋市）、愛知県立芸大を卒業後、ケルン国立音楽大に留学。ドイツ国家声楽教授資格を取得して卒業。ドイツでは国際ラジオ局のDJとしても5年半活躍した。帰国後、国内外のオーケストラとの共演やひとりオペラを全国で公演。2000年のハノーバー万博閉会式ではアジア代表として独唱し、05年の愛・地球博でもソロコンサートを開いた。

現在は学校や自治体、企業などで歌を交えた講演も行う。08年に愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞。名城大大学院でドイツ語やドイツ文化論も教える。